

巻頭言 「恩寵のぬくもり」

宇野 元

子どもたちがまだ小さかった頃、霞ヶ浦の近郊で過ごしました。教会は町はずれの丘陵にあり、畑、竹林、雑木林の斜面に囲まれていました。春になると沢山の椿や山桜、夏は百合やむくげが咲きました。芝生の庭の奥には、合歓の木がのびのびと枝を伸ばしていました。そんな自然に恵まれた教会に、パーゴラと広いテラスを新設し、薔薇のアーチから庭へ誘う仕掛けを作りました。パーゴラにはもちろん、テラスの周りも薔薇を巡らしたものです。



小さな教会は、カナダ人夫妻の手でバンガロー風に建てられていました。ちょっと芦屋教会の礼拝堂の構造と似ていないこともないかもしれません。中二階があって、階段がしつらえてありました。簡素な礼拝室には、目立たない所に白黒の写真が掛かっていました。フランスで活動したことのある写真家が寄贈されたのを、どこに飾るのがいいかと探して、中二階に登る階段の横によい場所を見つけたのでした。一見地味な印象の写真に近づくと、満開の花をつけたまま横たわる桜の大木が映されています。激しい嵐の翌日、パリの公園に行って撮影したと伺いました。幹が裂かれた桜の木。イエス・キリストの十字架が思い浮かびます。

礼拝室にはもうひとつ、性能の良い国産の音響機器と Bose スピーカーが設置されていました。外の風の音、そして CD に耳を凝らしました。主日の朝は、ダウランドのリュート曲とバッハの無伴奏チェロ組曲をよく用いました。それから、バッハのオルガン曲を。ダウランドは自然の光の優しいきらめきを思わせ、バッハは恩寵のぬくもりのようだと思います。行き場のない怒りや苛立ち。自分のいたらなさに対する心の揺れ。じっと雨に打たれ続けているような悲しみ。世の罪、いいえ、自分の罪。苦しい私を包む、ほの明るい暖かい光。

先月、パイプオルガンのメンテナンスが行われました。オルガンビルダーの N 氏、それからご奉仕された方々に感謝いたします。コロナ禍においてこのような機会が実現したのは祝福であると思います。二日間の作業が無事に終わり、パイプオルガンが新しく響いてくれています。芦屋教会は、賛美の賜物が豊かな教会です。加えて、賛美のためのよい道具が備えられていますね。困難な状況のなか、今いちど木漏れ日のさす森のような礼拝堂に集まり、神を讃える礼拝を捧げます。イエス・キリストの苦難と勝利、罪のゆるしと命の幸いを心から感謝して。